

季刊

ふれあい春号 No.25

2021年 3月

〒333-0831 川口市木曾呂1317
Tel.0570-00-4771
ホームページ
<https://kyoudou-hp.com/>




特集 協同病院の 医療安全と感染対策

左：吉川奈津美 看護師 感染管理認定看護師 中央：増田剛 院長 右：宮崎俊子 薬剤師 医療安全管理室責任者 (撮影のためマスクを外しています)

当院職員への激励メッセージありがとうございます

当院職員に向けて、地域の方から激励のメッセージをいただいています。川口市医師会を通じて元郷南小から「たいへんだけれどがんばってください」など約100通のメッセージを集めたポスターをいただきました。また、領家中からは応援の声を動画で寄せていただきました。戸塚南支部の運営委員会からもメッセージの寄せ書きをいただき、日々の現場でも患者さんや組合員さんから励ましの声をいただいています。メッセージは休憩室に掲示するなどして職員で共有しています。



増田院長の 今日ニコニコ VOL.25



今回のふれあいでは、医療安全と感染対策を取り上げました。元々は専門用語的な熟語ですが、ニュース報道などでも耳にする機会が多くなり、御存知の方が多くかと思えます。これらは、その医療機関の「医療・介護の質」を規定する重要な要因となるものです。病院で行われている仕事内容をその道の専門家が点検・評価し、より良いものに改善させていく「第三者評価」という取り組みが、1990年代から日本でも盛んに行われるようになりましたが、その中でも医療安全や感染対策は大変重要な点検項目となっています。

安全・安心の職場環境を整備することは、安全・安心の医療・介護サービスを提供する上で欠かせないことです。しかも、この課題は恒常的・持続的に取り組まなければならないと、院長直轄の常設部署として機能していることが求められています。当院では特別な教育を受けた専門職が専従として携わっており、病院全体のレベルアップを支えてくれているのです。



虹の投書箱だより 投書のご紹介

いつもにこにこ元気の良いお兄さんが今日もせつせと椅子や手すりをふいてくれています。
言葉づかひも丁寧で対応もいいですね。だから私は安心して協同病院に来ることが出来ます。ありがとうございます。



このたびは虹の箱への投書を頂きありがとうございます。
椅子や手すりの清掃にあたっての職員に対してのご意見を頂きありがとうございます。感染対策上できることを確実に実施し、患者様への丁寧な対応についても一層心がけて参ります。
今後ともどうぞよろしくお願い致します。 (看護部長 見川 葉子)



協同病院の

医療安全と 感染対策

今回の特集は、埼玉協同病院の医療安全・感染対策です。院長をはじめ、医療安全管理室と感染管理室それぞれの専任スタッフに取り組み内容を伺います。医療安全と感染対策の文化の醸成のための、工夫や課題が見えてきました。

患者さんを守ることは ご家族や職員を守ること。 地域と一緒に 「医療の質」を高めます。

医療の安全や感染対策に関心が高まっています。埼玉協同病院では、どのような体制で、どんなことに、どのような気持ちで日々取り組んでいるのでしょうか。増田院長と専任スタッフが語ります。



増田 剛
医師 院長

長年の取り組みが 新型コロナ対策に生きている

増田 医療安全や感染対策の取り組みは、今に始まったことではありません。1990年代、日本では手術患者の取り違えなどの医療過誤の報道が相次ぎ、社会問題になりました。患者の権利や「医療の質」の大切さが叫ばれるようになったのもこの頃です。

2000年以降、国が安全対策を推進。安全管理体制を整備している医療機関に診療報酬が加算される仕組みもつくられました。

宮崎 そうした中、埼玉協同病院が加盟する全日本民医連は、早い時期から取り

組みを始めていたんですね。

増田 そうです。「医療事故は個人の責任ではなく組織の問題であり、医療安全は現場のシステムと組織文化で実現する」との方針を打ち出し、医療の質の向上に取り組んできました。感染対策も専門部署を新設。こうした蓄積が、今回の新型コロナ対策に生きていると感じます。

資格を持つ専任スタッフが 安全対策を牽引

増田 仕組みをつくれれば物事が進展するわけではなく、一人ひとりの気づきや意識をどのように醸成していくかが大切です。そこで力を発揮するのが、専門知識を備えた専任スタッフです。医療安全管理部門は、薬剤師の宮崎さんが医療安全管理者として10年以上担当していますね。

宮崎 はい。2009年から統括しています。院内で起きた事故の報告を受けて毎週検討するほか、毎月1回、院長直轄の「医療安全委員会」で検討し、改善策を立案、実行。委員会のメンバーや各部署のリスクマネージャーを通じて、職員全員の意識が高まるよう努めています。

増田 2012年度にスタートした感染対策部門で活躍しているのが、感染管理認定看護師の吉田智恵子さんと吉川さんです。

吉川 はい。同じく院長直轄の「感染対

策委員会」では、院長、看護部長、薬剤科、検査科の責任者、透析室の看護長などが月1回集まって情報共有し、対策を実施しています。また、多職種で感染制御チーム(ICT)やリンクスタッフ(部署ICS)会議を組織し、定期的に院内を巡視。適切な感染対策ができているかをチェックし、改善する活動にも力を入れています(6~7P参照)。

一人ひとりが自発的に動く 「安全文化」をつくりたい

増田 患者さんが廊下で転倒する、使用後の針を職員が誤って自分に刺すなどの事例も含め、医療事故は、どの病院でも毎日のように起こります。事故には至らなかったことも含めて報告を受け、分析し、再発防止や即時対応の仕組みをつくっていくことが重要で、埼玉協同病院は、それを20年以上続けてきました。

宮崎 大切にしているのは「安全文化」。「注意しましょう」と呼びかけるだけでなく、何が大事かを一人ひとりが理解し、意識や行動を変える。未遂で終わったちょっとしたニアミスでも報告して、何が悪かったかを点検し合うことです。

増田 ささいなことでも報告する文化があるかどうかは病院の質が表れます。

宮崎 医療安全委員会が声をかける前



宮崎 俊子
薬剤師 医療安全管理室 課長

に、各部署のリスクマネージャーを中心に、起きたことや起こりそうなことを自分たちで分析し、どうすれば再発防止できるかを話し合う。そんな風土を目指しています。

増田 感染対策では、2013年から始めた手指消毒剤の個人携帯や、手指衛生の工夫を部門ごとに競う「手指衛生アワード」などの独自の取り組みが定着していますね。

吉川 みんな頑張っています。職員が感染源になれば、患者さんに感染させてし

もう恐れがあります。感染対策は患者さんを守ると同時に、職員自身を守るためにも非常に重要。そのことをしっかり伝えたいです。

近隣の病院と連携し 地域全体の質を上げる

増田 2012年の診療報酬改定を機に、地域合同の取り組みも行っています。感染管理認定看護師のいる4つの基幹病院と、その近隣10病院、全体で感染対策のレベルを上げていこうとの取り組みで



吉川 奈津美
感染管理認定看護師 感染管理室 指導員

す。

吉川 訪問して環境ラウンドを実施したり、当院にチェックをいれてもらったりしています。感染対策の相談やアドバイスも行います。

宮崎 医療安全部門は、地域連携を始めて3年。病院数もまだ3つと少ないですが、互いの施設を

巡視し、気になるところや改善できるところを指摘し合っています。
増田 基幹病院の役割が変わってきているんですね。専従者を置けない病院も多いなか、医療安全や感染対策の専従者を置き、地域の医療の質を高めるための仕事をします。それに対して診療報酬が加算されるようになっています。

安全対策はチーム医療 信頼関係があつてこそ

増田 大切なのは、こうした活動はすべて、多職種が協働する「チーム医療」であること。ICTの環境ラウンドでも、改善点を指摘されて反発するような関係ではうまくいきません。医療の質を高めるには、日頃から職員間のコミュニケーションが良好で、仲が良いことが極めて重要。



それは埼玉協同病院の良いところじゃないかな。

吉川 職員同士話しかけやすく、互いに思いやる風土がありますね。費用面でも、患者さんのために必要なことは病院として対策しなければならないとの考えでいてくれます。

宮崎 職員だけでなく、患者さんやご家族、他の病院や地域の方々もすべて「チーム」に含まれますね。一人ひとりの意識や力で、安全対策の質を上げていかなければ。

増田 薬が効かない耐性菌の問題は深刻で、今後も新たな感染症が出てくる、その時にどう対応できるか。

吉川 できることはまだまだあると感じています。

医療安全委員会 は 医療事故の防止に取り組んでいます

職員全員の努力とともに
患者さんやご家族の協力が
不可欠です

宮崎 俊子
薬剤師 医療安全管理室 課長
医療安全管理者



医療における安全を確保するために活動しているのが、私たち「医療安全委員会」です。院長を長とし、すべての部署にリスク・マネジャーを配置して、医療事故を防止するとともに安全への意識を高めていけるよう、病院全体で取り組んでいます。主に行っているのは、未然に防げた事例も含めて、院内で発生した医療事故の把握と、再発防止のための対策立案です。

安全を確保するには、職員だけでなく、患者さんやご家族の協力も不可欠です。入院や診察時の本人確認、感染防止のための手洗いや手指消毒、マスク着用、入院時の転倒や転落を防止するためのナースコールなど、ぜひ徹底をお願いします。

人工呼吸器の適切な使用を見守る 呼吸ケアチーム「RST」

多職種が協働し、患者さんの安全を確保

医療安全への取り組みの一つが、RSTと呼ばれる呼吸ケアチームの活動です。呼吸器の専門医を中心に、看護師、臨床工学技士、理学療法士、栄養士、歯科衛生師、薬剤師がチームを組み、人工呼吸器などで呼吸の補助を受けている患者さん一人ひとりをサポート。週1回のカンファレンス(検討会議)と回診で、患者さんの状態と、人工呼吸器が安全に正しく使われているかを確認し、なるべく早く人工呼吸器を外せるようにお手伝いをしています。



感染制御チーム「ICT」の環境ラウンドに密着!

インフェクション(感染)コントロール(制御)チーム=ICTは、専門資格を持つ医師や看護師、薬剤師、臨床検査技師、臨床工学技士、事務職員などがチームを組み、院内を巡視(ラウンド)。感染対策の環境が整っているか、厳しくチェックします。



▲ナースステーションで、ICT環境ラウンドの開始を伝えます。



手指消毒から薬品や廃棄物の管理、トイレの中まで、チェック項目は49項目。一つひとつ確認し、○×を記入します。



▲シンクが汚れていないか、水がはねる部分にもものを置いていないかなど、手洗いの環境をチェック。

▼薬品が衛生的に管理されているか、専門の薬剤師が保冷庫や保管棚を隅々まで調べます。



▼問題点や改善すべき点、良くなっている点などを病棟の責任者に伝えます。単に注意するのではなく、なぜ危険なのか、その意味を理解してもらうことを大切にしています。



▶2チームに分かれてひとつの病棟を巡視した後、チーム全員で報告書を作成し、病院全体で共有します。各部署のメンバーは交代制なので、環境ラウンドに参加することで環境を見る目が鍛えられ、自分の職場を安全な環境にしようとの意識が高まります。



▶メンバーの表情は真剣そのもの。ささいなことを見逃しません。



▲ひとつの病棟を巡視した後、チーム全員で報告書を作成し、病院全体で共有します。各部署のメンバーは交代制なので、環境ラウンドに参加することで環境を見る目が鍛えられ、自分の職場を安全な環境にしようとの意識が高まります。

急に指名されてドキドキしましたが、合格をもらってほっとしました。気持ちが引き締まります。



▲「手を洗ってください」と、その場にいた職員に声をかけ、手洗いの仕方をチェック。



▲手指消毒剤の配置場所や、ゴミ箱、トイレの中も念入りに。気になる部分は写真で記録します。

どんなに忙しい病棟でも、感染対策がきちんとできていないと患者さんに不利益が生じます。習慣として根付くよう、しっかり指摘を続けます。

吉川奈津美
感染管理認定看護師
感染管理室 指導員

専門医24
シリーズ
SERIES

越智 篤
医師
耳鼻咽喉科 部長

耳、鼻、のどの疾患に 幅広く対応。地域の ニーズに応えます。

2018年、埼玉協同病院の耳鼻咽喉科に常勤のドクターが着任しました。大学病院や総合病院で経験を積んだ越智篤医師は、外来から手術まで、耳、鼻、のどの疾患を熟知する専門医。患者さんはもちろん、地域の開業医の先生方からも厚く信頼されています。

プロフィール▶神奈川県横浜市出身。2000年、東京大学医学部医学科卒業。大学病院や都立病院を経て、2012年より亀田総合病院耳鼻咽喉科部長。2018年より埼玉協同病院にて現職。日本耳鼻咽喉科学会専門医・指導医。



開業医の先生では扱いが 難しい疾患を手がける

耳鼻咽喉科は、耳、鼻、のどの病気を診断・治療する科です。埼玉協同病院の耳鼻咽喉科は、市内の開業医さんと連携して診療に当たっています。

「地域の中核病院ですから、その役割を果たすことが第一。開業医の先生では手の回らない、やや踏み込んだ検査・治療も行うことで地域の患者さんの役に立ちたい」

と、越智医師は穏やかに話します。「たとえば、リハビリ病棟に入院していたり、在宅療養をしている患者さんで、人工呼吸器などをつけるために気管切開をしている方がいらっしゃいます。そうした患者さんにトラブルが起きたとき、耳鼻咽喉科の専門医がいなければ難しい場面が多いのです」

気管切開は、神経の難病であるALSや、脳梗塞、食道がんなど、いろいろな病気が必要になるそうです。他の科の医師からも頼りにされており、今号で取材した呼吸ケアチーム「RST」の回診(P.5)でも、人工呼吸器をつけた患者さんの呼吸がもっと楽になるよう、「越智先生に相談してみよう」と呼吸器科の先生が話している場面を目にしました。

新しい治療法を取り入れ 重症の花粉症の治療も

重症の花粉症の患者さんの治療も行っており、地域の開業医の先生からの紹介がずいぶん増えているそうです。

「新しく承認された抗体医薬(生物学的製剤)という薬を使った治療や、舌下免疫療法を始めています。一歩踏み込んだ治療をしたい方は、紹介状を持って来ていただければ、いろいろな選択

肢を提示します」

また、花粉症に限らず、ちくのう症などの鼻の手術や、扁桃腺の手術も行います。

埼玉協同病院には、長らく、耳鼻咽喉科の常勤の専門医がいませんでしたが、越智医師が着任したことで、このように、チーム医療や地域医療がしやすくなっているのです。

「気になる症状があれば、まずは地域の開業医の先生に診てもらい、そこでできないことは埼玉協同病院で診る。さらに専門性の高い疾患は、ある程度診断をつけた上で専門医療機関に紹介する。こうして、耳、鼻、のどの疾患をできるだけ地域の中で治療していけるよう、診療体制を整えています。

現在、紹介状なしの初診患者さんは予約不可で待ち時間も長くなっていますが、地域の内科・耳鼻科の開業医の

先生からの紹介状をお持ちの方は予約可能(地域連携室にお電話いただいた場合)です。予約がない場合も比較的に少ない待ち時間で診察しています」

においや聞こえ方など 「感覚」を扱う面白さ

こうして活躍している越智医師ですが、子どもの頃は、エンジニアや科学者にあこがれていたそうです。しかし、実験や研究は向いていないと思い、医学の道へ。学生時代、寮で一番仲が良かった先輩が耳鼻咽喉科を選んだことから、この分野に興味を持ったそうです。

「一つのことを突き詰めるよりも、いろいろなことを幅広く扱う方が好きなので、広い範囲をカバーする耳鼻咽喉科が自分に合っているんです。たとえば、首の部分には、呼吸をしたり、ごはんを食べたりするためのいろいろな神経や機能が集まっていて、とても複雑です。

のどの手術と、耳の手術はまったく違うし、薬で治す、リハビリで治す、手術で治すというように、治療法もひとつに特化しないですべて網羅していなければいけません。そこにやりがいを感じます」

人の「感覚」を扱う面白さもあります。「感覚器は、この音がどう聞こえるか、このにおいがどんなにおいかというように、人がどう感じるかを学問す

る領域で、とても興味深いです」

子どもの頃から本を読むのも大好きで、現在も診療のかたわら、学会誌や雑誌などを読んでコツコツと勉強することを欠かしません。そこで得た知識や考察をもとに、新しいことを試そうと日々考えているそうです。

総合病院で 緊急手術を数多く経験

大学病院や都立病院、総合病院で経験を積み、埼玉協同病院に赴任したのは2018年。所属している東京大学の医局から派遣される形でした。

聞けば、前職の大型総合病院では、外来も手術も、緊急手術も1人で担当していたとか。

「判断に迷う症例や、救急で手術が必要な症例も多い中、専門医は私だけ。年間500件もの通常手術のほか、緊急手術を30件から40件くらいやりました。耳鼻科であること、1人で担当していたことを考えると、かなり多い



と思います」

こうした経験を通じて、耳、鼻、のどの関わるさまざまな疾患や問題に対応できる幅広い知識と技術を体得したことが、埼玉協同病院のニーズと合致し、地域医療に貢献する大きな力となっています。

目の前の患者さんに ベストな医療を提示する

埼玉協同病院は、医師や職員の士気が高く、やる気を感じると越智医師は話します。

「社会的な弱者にしっかり目を向けようという姿勢を強く感じます。問題を解決するには、社会全体が変わっていくことが必要。私自身は医者として、目の前に来た患者さんにベストな医療的解決法を提示することを頑張ろうと思っています」

常に念頭に置いているのは、地域医療に必要とされる医療を提供すること。「そのためにも、患者さんが困っていることに対して、そのときに自分ができることをきちんとやりきることを大事にしています」

20年を超える経験から、冷静に判断し、地域の病院や専門病院と連携しながら地域医療を担っていく。まさにプロフェッショナルの安心感を感じさせるドクターです。



新しい病院の医療機能について 検討をしています

埼玉協同病院 建設事務局会議

現在、『第2病院(仮称)建設構想具体化検討プロジェクト』(下図)を2020年9月から立ち上げ、職員を中心に、外来、入院、在宅、健康診断の各分野に分かれて、第2病院(仮称)へ移行した際の医療機能の内容や患者様の受診の動線などについて検討を始めました。

11月に行われた第5回の建設委員会

プロジェクトの役割

- (1)第2病院(仮称)の在宅療養支援病棟の入院、外来、在宅診療機能について「基本構想」(総代会決定)の具体化を図る。
- (2)本院、老健みぬま、CCきょうどう、法人内事業所、法人外事業所との連携課題を整理する。
- (3)構想の具体化の中で見えてきた施設的な整備課題を基本設計に可能な限り反映する。

総会ではその全体像をご報告しました。

第2病院(仮称)は地域包括ケア病棟を有し、患者が住み慣れた地域で安心して療養生活を送れるように、訪問看護ステーションとの連携で、緊急時に在宅療養を行っている患者様が、直ちに入院できるなど、必要に応じた医療・看護を提供できる病院という入院機能を軸に検討を行っています。

この病棟の機能により、高齢になっても、病気を抱えても在宅療養する方の安心感を高めていくことができます。

また第2病院(仮称)は、在宅支援を強化します。訪問診療は現在よりも患者数を増やし、病院に通院できなくなった患者様のお宅に訪問して診療を継続できる

ように努めます。さらに退院後の不安をできるだけ軽減し、在宅での療養生活が継続できるように、退院後の訪問リハビリを開始します。多くの介護事業所と連携しながら、患者様の療養生活を支えていきます。

外来診療のあり方は総会に参加された組合員さんからも、「かかりやすい外来を」「最後まで診て欲しい」などのご意見をいただいています。

私たち職員としては、できるだけ待ち時間が少なく、わかりやすい外来診療を目指すために、どのような工夫が必要かなど検討をすすめています。

予約時間通り進めるためには、受診前の準備、検査の受け方などを変更していく必要があると考えています。

今までのやり方を振り返り、新しい病院を作る大きな機会です。業務を簡素化し、どなたにもわかりやすい病院づくりを目指していきます。



掲載CGは計画段階のものであり、施工上等の理由により変更となる場合があります。提供：竹中工務店

生々支部活動
しています!

医療生協さいたま
新郷支部
組合員数
2,600人

新郷支部
編

「新郷支部だより」
または組合員活動課まで
連絡先
電話：048-296-8180(直通)

どんな活動をしていますか?

- 無理をしないことと、人とのつながりを大切にして活動しています。毎月開催しているのは、「いつでも体操」などを楽しむ健康ひろば、おしゃべりしながら手芸を楽しむサンサンクラブ、絵手紙教室、ウォーキング。楽しいですよ! (支部長・東千代實さん)
- 支部長による手書きの『新郷支部だより』も好評です (副支部長・渡辺春江さん)
- 活動には職員さんも参加されるので、病院を身近に感じられて心強いです (運営委員・齊藤マサ子さん)

組合員さんに一言!

- 一緒に活動できる方、大歓迎です。ぜひ一度、集まりにおいでください。若い方もお気軽に! (東さん)
- 待ってまーす (渡辺さん・齊藤さん)

「いつでも体操」
楽しんでいます!
(辰井公園にて)



たまねぎベビー
といっしょに

コロナ禍の1年

『コロナ?』あれから1年が経ちました。経験したことのない怒濤の1年は、子どもたちにとっても親にとっても大変な1年だったと思います。その中で医療従事者に向け、多くの温かいメッセージをいただきました。励まされると同時に、誰もが大変な中で人を思いやることのできる心の温かさ、力強い言葉に生きていく力を育んでいるたくましさを感じました。大変なことだらけでしたが、ふと見つけた小さな芽吹きに生命の息吹を感じ、自然のエネルギーを受け取る瞬間もありました。コロナ禍で失うものもあったかもしれませんが、多くのことを感じ、気づかされた1年でもあったかもしれません。まだまだ長い闘いになりそうです、コロナが私たちに問いかけていることは何でしょうか? 耳を傾けつつ前を向いて、世界中に春が来る日を待ちわびて。

コロナ禍で見つけた10のこと

- ①何をしたら楽しくなるか考えた ……→想像力UP
- ②何がしたいか考えて実践した ……→思考力・実践力UP
- ③自分で考えたことが楽しかった ……→成功体験・自信UP
- ④工作やクッキングなどに時間をかけた ……→集中力UP
- ⑤緊急事態宣言や休校などの変化にも適応してきた ……→生きる力UP
- ⑥感染予防に取り組んだ ……→自己防衛力UP
- ⑦一人一人が困難を乗り越えてきた ……→自己解決能力UP
- ⑧向き合う時間の増加で愛情・安心を感じ、自分自身が大切な存在だと感じられた ……→自己肯定感UP
- ⑨家族や友だち、人とのつながりの大切さを感じた ……→絆・思いやりの気持ちUP
- ⑩何より健康の大切さを実感した ……→命の重さへの思いUP

あなたはどんなことが向上しましたか?
肯定的な気持ちへの切り替えを大切に!